氏　　名	上田　和子
学 位 の 種 類	博士(文学)
学 位 記 の 番 号	第 101 号（乙）
学位授与年月日	2023 年 11 月 22 日
学位授与の要件	
学位論文の題目	
論 文 審 査 委 員	主　査　　木下　りか
	副　査　　中山　亜紀子
	副　査　　影山　尚之

論 文 内 容 の 要 旨

1 概要

本論文は、上田氏の 30 数年にわたる日本語教師と日本語教員養成の豊富な経験を踏まえて作成されている。553 ページに及ぶ大著である。リサーチクエスチョンは 2 点ある。

1 点目は、実践研究に価値はあるのか(**「実践研究とその記述の価値の再考」**)という問いである。実践研究は「研究としてレベルが低い」(p.5)と一般に認識されるにもかかわらず、上田氏は「書かずにはいられない何か」(p.5)に背中を押されて実践研究を書き続けてきた。では実践研究にはどのような価値があったのか。その思いを検証しようとする問いである。

2 点目は、自分がどのようにして日本語教師としての専門性を身に着けてきたのか、という問いである(**「日本語教師としての「言語獲得」のプロセス、言語学習・言語教育観の変遷」**)。日本語教育に携わってから数 10 年を経た時、上田氏は、日本語教員養成課程の受講生と自身との日本語の捉え方が想像を超えて大きく異なることを認識する。自身も日本語教師になる以前は、受講生と同じであったはずである。では、そこからどのようにして今の言語観、言語学習観・言語教育観をもつに至ったのか。その過程に関する問いである。

研究の手法は、「著述の物語(writing-stories)」である。「著述の物語」とは、著述の行われた時の文脈についての語り(narrative)である。論文など書かれたものがどのような文脈(context)の下で生み出されたのか、そのときの学術的な動向、自身の研究上の関心、職場の方針、社会の状況、私生活などについて語る。それは、書いていたその時々の自分自身を再帰的に見直すこと(critical reflexivity)になる。自身がこれまでに書いてきたものの文脈を記述する「著述の物語」の方法により、その著述行為そのものが何を意味するのか、また、自身がどのように変わってきたのかを捉えるのである。

「著述の物語」の執筆を経て、リサーチクエスチョンのうち**「実践研究とその記述の価値の再考」**については、「実践報告すなわち教育実践を記録し、「それを論文或いは報告書として記述する行為に、研究としての価値を有することが確認」(要旨 p2)される。また、**「日本語教師としての「言語獲得」のプロ**

セス、言語学習・言語教育観の変遷」については、教育現場で人と関わる中で専門性が培われ（「言語獲得」がなされ）、言語学習・言語教育観は、その多様な現場の状況が決定してきたのだという気づきが生まれる。

本論文は、全体を 4 部に分かち、各部に 2 章を設けて、全 8 章計 30 篇の論考を収録している。4 部構成はすなわち第一部「出会い・越える」、第二部「システム構築のはざまにあるもの」、第三部「教えることを教える」、第四部「自己を語る」であり、上田氏の実践研究論文やエッセイなどの著述が、それに関する語りとともに区分されている。

論文審査並びに最終試験の要旨

2 研究手法の妥当性

研究の手法は、社会学者リチャードソンが提唱した「著述の物語」である。という形ではなく、ことばで伝える「質的研究」（qualitative research）のひとつである。質的なアプローチが妥当となるケースとして（大谷 2017:654）は、「研究参加者自身が言語化していないためアンケートが不可能」な場合をあげている。本論文は、長きにわたる日本語教育とのかかわりという、上田氏自身も言語化できていない事柄についての探究である。それゆえ、本研究において「質的研究」という方法を選定したことは妥当だと考えられる。

「質的研究」の中でも、とくに「著述の物語」が選択されていることにも妥当性がある。本論文の研究対象は、論文の作成者自身である。探究の対象が自己である場合、認識だけに頼れば主観性が極めて強くなる。それを回避するには、何らかの動かない事実を手掛かりにすることが望ましい、著述はその有力候補であろう。

また、この「著述の物語」という研究の方法は広く行われているわけではない。新たな挑戦を提供することで、「質的研究」の分野の発展に貢献できる可能性も認められる。

3 考察の妥当性

「著述の物語」を書くことで、上田氏は他者（「**あなた**」）の存在によって専門性を育み、よって立つ言語学習・言語教育観を決定してきたことに気づく。実践研究を書く価値も、この「**あなた**」の存在の意識化にある。

3．1 実践研究とその記述の価値の再考—ひとつめのリサーチクエスチョンをめぐって

「著述の物語」を書くことで明らかになったのは、実践研究を行うときに、自身が常にその教育現場の背景にある文脈、たとえば個々の学習者の学習観や社会的背景に目を向けていたということである。日本語教育の現場は本来的に異文化を含む。上田氏は異文化の中で「**あなた**」を理解する努力をし、そのうえでどのような教育をするべきかを考え、そのして日本語教育や日本語教員養成における可能性を広げてきた。このことが長年の経験と実績の重みを伴って語られる。裏返せば、実践研究は上田氏にとって、学習者に代表される「**あなた**」を深く理解するための有効な手段でもあったと理解される。

３．２「日本語教師としての「言語獲得」のプロセス、言語学習・言語教育観の変遷」

―2つめのリサーチクエスチョンをめぐって

「著述の物語」の執筆により、上田氏は日本語教師としての「言語獲得」、すなわち専門性の獲得が、学習者を含む他者（「**あなた**」）によってもたらされると気づく。たとえばふだんは無意識化にある母語を客体化してくれるのは、「**あなた**」である。また、学習者を肩書、たとえば外交官というだけでひとくくりにはできないことを示し、教育プログラムのありようを考えさせてくれるのも「**あなた**」である。つまり、日本語教師としての専門性は、「**あなた**」の存在をふまえて実践研究を書くことでもたらされたと言える。このことが語りの力で示される。

「日本語教師としての「言語獲得」のプロセス、言語学習・言語教育観の変遷」の問題は、よって立つ「理論」の変遷として語られる。言語学習・言語教育観と理論は密接な関係がある。たとえば「オートノミー」（autonomy）は理論と呼べるであろうが、それは主体的に学ぶ学習者という言語学習・言語教育観を含む。

上田氏は理論と実践との関係についてこう述べる。「長い実践の中であるさまざまな研究課題を考えるため、そのつど求める先行研究や理論は異なっていた。（中略）理論はトップダウンではなく流動的な実践の場を側面から支援する存在として考えることができるのではないか」（P535）。

理論と実践は、車の両輪に喩えられることが多い。実践をもとに理論は構築/再構築され、理論をもとに実践が行われる。しかし、上田氏は理論を実践の伴走者に喩える。まず現場があり、理論はそれをサポートする。理論（言語学習・言語教育観））は、発展するものというよりむしろ、多様な現場の状況に依存して変遷していくものなのである。この見方を理論と実践との関係に関する他の捉えからの中で相対化する必要は残される。しかし、これが上田氏の 30 数年にわたる教育実践に関する語りを通し、現場の多様性の重みとして示されている。教育における「**あなた**」の重みの指摘も言えるだろう。

４　本研究の主張をめぐって

本研究おける「**あなた**」の規定には、ブーバーの『我と汝』があることが示唆されている。本研究は、上田氏が学習者にだれかが作ったカテゴリーを当てはめるのではなく、自分の目で、自分の存在をかけて、学習者らに「**あなた**」と呼びかけ、ブーバーの言う「我―汝」の関係性を作っていった記録でもあると言える。日本語教育界が「学習者の多様性」の一言で、「大学生」「成人学習者」とカテゴリーに分類して一律に学習者らが必要とするものを当てはめたり、実験的な手法で得られる「こうすれば、こう上手になる」的な＝学習者を「それ」と設定したりする研究とは一線を画している。上田氏はこれら国・地域や年代の異なるさまざまな学習者らと向き合い、彼らが何を必要としているのかを問い、彼らが教室を卒業して出ていく社会、そこでの日本語使用を考えている。総 30 篇の実践研究を通して垣間見ることのできる、教師である上田氏の学習者らに対する眼差しは本研究の魅力である。日本語教育学で数多く書かれる、実践研究/実践報告は、（多くの場合、教育実践を行った教師が自らの実践を書き起こしたものであるが）、研究未満のように扱われることが多い。科学的な「我―それ」にのっとった言葉ではなく、「我―汝」の言葉で実践を語り、その価値を認めるべきだ。本研究の主張の一つはそこにあるのではないか。

本研究の主張は、日本語教師という職業にも向かっている。上田氏は、学習者や学生との対話をするだけが教師の仕事ではないとはっきりと述べている。「日本語教師のマルチタスク」の一段落では、教師の中で学習者や学生と対話したうえで、彼らの置かれている状況や彼らが出ていく社会を見て、それぞれに必要なものを提供するために、同僚教師や学校内だけではなく、さまざまな関連団体とも交渉する。その中には、教材を提供することももちろん含まれる。これだけ高度なマルチタスクを行う人材でありながら、日本社会における扱いは不当に低い。日本語教師の専門性が「生得的な言語能力」(p.8)に委ねられて体という主張は、説得力を持つ。

また、日本語教師養成についての第三Ⅳ章から上田氏の筆は鋭さをまし、日本語教師という日本の国際化とともに発展してきた職業を取り巻く状況について、経済面、政策面を含め、現在の日本の状況を批判し、提言を行っている。社会を広く見渡す視野と、現実主義的に現状を見据える視線は、本研究に緊張感を与えている。「我と汝」という対話を行うことができる教育実践でありながら、その専門性が十分に認められない日本語教師の状況に対する歯がゆさと、上田氏の日本語教師という職業に対する矜持が伺える。この部分に書かれている「あなた」は、我との連続性を持つ「**あなた**」であり、第一部、第二部に見られる汝とは異なる。

しかしながら、著述の物語として、自信の実践を振り返り、描く際には、もっと貪欲になってもよかったのではないかという感想が残る。非常に控えめで、時にはほとんど消え入りそうに、過去の実践を評価ししている(例えば、P139 に「私たちの思っていた「自律学習」は空回りし始めた」とあるが、どこの部分を指しているのか、明確ではない)。なぜそのように控えめであるのかと言えば、それは実践研究が、上にのべたように教育の根幹にかかわる記述でありながらも、その価値が十分には評価されてこなかった研究界の問題があるのではないかと考える。

5 総評

「著述の物語」を書くことで見えてきたのは、その時々の現場、とくに学習者をみつめて教育を考えることで上田氏が専門性を培ってきたということ、実践研究がそれを支えていたということである。それは「著述の物語」を書く以前には上田氏も認識していなかった気づきであり、本論文の成果である。むろん、自己の相対化など、「著述の物語」が求める再帰的な自己の捉えなおし(critical reflexivity)に終わりはない。すべての論考がそうであるように、今後の課題は残される。しかし、現段階で十分な成果が挙げられていると言える。

また、著述として取り上げられた 30 篇そのものにも価値がある。3編の未発表稿を含むが、大部分は学会・研究界機関紙ならびに紀要類において既に公表されている。多くの重要な知見を提示し、日本語教育研究領域における一定の評価を確立している論考である。

以上のことから、本論文は博士(文学)学位論文としての価値を有すると判断する。